

第25期第5回常任理事会議事録

日時：平成元年2月21日 13:00～18:00

場所：東京管区気象台 第1会議室

出席者：浅井、竹内、河村、中村、古賀、村松、木田、村上

議題

A. 報告事項

1. 第25期第4回議事録は一部修正の上承認された。
2. 各委員会報告

「庶務」

資料に基づき報告があった。主なものは次の通り。

- ア 昭和63年度の各支部における講演会、研究活動状況の報告
- イ 第10回風工学シンポジウム(本年1月27日実施)の論文集が発行された。当学会でも販売する。
- ウ 平成元年度「天気」の入札説明会が2月13日に行われた。入札参加は4社。

「天気」

- ア 故神山 恵三氏(元理事) 紙碑は3月号
故堀内 剛二氏(堀内基金奨励賞) 紙碑は5月号
- イ 「天気」の印刷、出版方式を変更することを具体的に検討するワーキンググループを編集委員会の中に設けた。
- ウ 「天気」3月、4月号内容予定が紹介された。

「気象集誌」

- ア Vol. 67 No. 2 (1989年4月号)の編集予定が紹介された。
- イ カラーページは1印刷ページ当たり5万円で受け入れることとする。

「国際学術交流」

- ア 国際学術交流委員会(2月18日)の検討案の報告があった。
主なことは
 1. 2,000万円を目標額とし達成時点で募金活動を中止する。
 2. 平成2年度から基金の利息で事業運営を行う。

「AGU」

- ア AGUに関する最近の動きが総合計画担当理事

から報告された。

- イ AGU 共催に対する日本気象学会の正式の回答を出した。

B. 審議事項

1. 新規加入会員の承認

新規加入 個人会員 11名
退会 個人会員 12名

2. 平成元年度事業計画案・予算案

配布資料を検討、一部訂正した。消費税に関して見通しが不透明な点がある。この案を全国の理事に送付して意見を求め3月の常任委員会で理事会提出の最終案を作成することとした。

3. 正野賞について

第4回常任理事会の審議結果に基づいて、総合計画担当理事から「正野賞」は新進の研究者を対象とするものとし山本賞の論文賞を設立する案が提示された。

他の賞との関連についても多角的に検討された結果、案の主旨で大体の合意が得られた。

この線に沿って定款の各賞規定の細則を全面的に見直し、各賞間の整合を図ることとして、これらの成文を総合計画担当理事及び庶務担当理事に付託した。成案が出来次第全国の理事に送り意見を求めることとした。賞状の大きさなどは事務局で検討することになった。

4. 平成元年度学会賞・藤原賞について

それぞれの委員長から、候補者の推薦があり理事長から報告があった。

受賞者選定規定に基づいて、全理事の無記名投票を行うこととした。

5. 山本賞推薦委員について

山本賞受賞者選定規定により、委員が下記の通り決まった。

委員長 村上勝人(気象庁)

委員 岩坂 泰信(名古屋大学・水圏科学研究
所)

住 明正(東京大学)

村松 照男(気象庁)

藤谷徳之助(気象庁)

嶋村 克 (気象庁)
 浅野 正二 (気象庁)
 榎田 武彦 (東京理科大学)
 安成 哲三 (筑波大学)
 山本 晋 (公害資源研究所)

余田 成男 (京都大学)

6. その他 (話題)

- 1) 韓国の気象学会から非公式に交流希望の意向打診があった。 (理事長)
 今後交流を活発にする方向で、対処したい。

講演企画委員会からのお知らせ——アンケートへのご協力お願い

気象学会の大会については、近年の研究分野の多様化と講演数の増加に対応するため、以下のような改革が加えられてきました。

ポスター・セッションの導入 (1987春～)
 スペシャル・セッションの導入 (1988秋～)
 口頭発表の新しい方式の試行 (1989春～)

しかし、現行の方法にも問題点が残っていると思います。そこで、今後の講演企画の参考とするため、大会の

あり方について広く会員各位のご意見を伺いたいと思います。つきましては、号末のアンケート用紙にご記入の上、下記いずれかの方法でお届け下さい。

1. 春季大会会場受付に設けた箱に投入
2. 5月31日までに下記あて郵送

〒305 茨城県つくば市長峰 1-1

気象研究所 予報研究部内
 講演企画委員会 (藤部文昭)

編集後記: この編集後記執筆時点 (3月27日) で既に上野の桜は3分咲きとの新聞報道です。東京の開花は3月20日で平年より10日早く、昭和41年と並ぶ開花最早年となったそうです。また、3月15日高知・宇和島で開花し最早年であったのを初め、16日延岡・日田・三宅島等で最早の開花となるなど、報告された54気象官署中21官署で最早開花となったとのこと (3月27日現在)。大暖冬のためですが、またぞろ異常気象論議が盛んです。

異常気象と言えば炭酸ガス等の温室効果ガスによる地球温暖化にしても、オゾンホール問題にしても、炭酸ガスの場合はハワイ島における炭酸ガス観測、またオゾンホールではドブソン分光光度計やオゾンゾンデ観測等、長年にわたる地味な観測が最深部の基礎をなしていることに感動します。なかでも、1966年から日本により昭和基地で開始された南極大陸唯一の定常的オゾンゾンデによる垂直分布観測から、南極オゾンの減少が100 mb 付近を中心に下部成層圏で起こっていることが判り、これ

が原因究明に役立っていると聞くと、地道な基礎観測の大切さを思い知らされます。

重要な点は、これらの観測が温室効果やオゾンホールを意識して行われてきたのではないことです。これは、その時点で効果が期待されるものみに投資される姿勢に終始すれば、人類の絶滅要因を早くから察知して、人類を危機から救うことはできないことをしめす感動的な事実です。

昨今感ずるのは、高度情報化社会への対応に追われて、既存データのプロセッシング機能を向上さえすればそれでよいという風潮 (端的には観測は予報のためにのみあるという考え方) の恐ろしさです。

「天気」の編集にあたってとしても「気象学 (広く地球物理学) の原点が、永久に観測にあること」を銘記していきたいと思います。この点にご賛同される「天気」読者からの「天気」紙上の企画についてのご提案をお待ちしています。 (嶋村)